

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年9月29日(木)

《羽のない天使 ～限りある力で、誰かを救えるように～》

何か月か前にも説明をしましたが、ナタナエルというのは、12使徒の一人であるバルトロマイのことです。

今日は、少し違う角度から考えてみたいと思います。

今日の福音(ヨハネ 1:47 - 51)では、フィリポがナタナエルに話しかけました。その前の部分を読むと、フィリポは、「来てみなさい」とナタナエルに話しかけています。それを聞いたナタナエルは、フィリポとともにイエス様の方へ行きます。近づいてくるナタナエルを見てイエス様は、「まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」と、素晴らしい褒め方をなさっています。

福音では、ナタナエルはフィリポと話す前に『いちじくの木の下』にいた、と書かれています。イスラエル人にとって『いちじくの木の下』というのは、そこに席を設けて、真理を探しながら話し合いをする場です。つまりナタナエルは、『いちじくの木の下』で、「何が真理であるか。何がみ言葉であるか。何が聖書の正しい解釈であるか。」そういうことについて話し合いをしていたのです。そしてその様子を見たフィリポが、「私の仕えている主人は、本当の真理である。その方に会って見ないか。」と誘ったのです。その結果ナタナエルはイエス様に会い、心を奪われて12使徒になります。そして最後は殉教しました。

私たちの人生を振り返ってみましょう。たくさんの恩人との出会いがあったと思います。今は記憶にさえ無いような恩人もいるでしょう。その人のお陰で私はこのようになれた、と感謝の気持ちになる人がたくさんいると思います。私も、子どもの時、神学生の時、そして神父になってからも、いろいろ助けてもらった人がたくさんいます。しかし、人間の愚かさでしょうか。会わないでいるうちにすぐ忘れてしまい、名前さえ出てこない人もいます。皆様にもそのように、人生の方向に大きな影響を与えてくださった人がいると思います。また、困った時に手を伸ばしてくれた人もたくさんいるでしょう。

昔の教会の絵では、天使を描く時に羽をつけました。しかし、近世に入ってから、芸術家は天使に羽を描かなくなりました。それはつまり、「日常の生活の中で出会う天使は人間だ」ということです。皆様にも、天使のような恩人たちがいたと思います。もし逆に、私たちにその天使のような役割ができれば、誰かに手を伸ばして、その人を救う役に立てれば、これは最高ではないでしょうか。聖書の中でも、イエス様は「もし、あなたによって誰かが天国に入ることができれば、最高の愛の実践である」とおっしゃっています。

私によって救われ、今もどこかで一生懸命生きている人がいれば、これも最高の喜びではないでしょうか。

今日の福音を通して、そして天使の祝日を通して、もう一回、考えてみましょう。もし私たちが天使のような存在になれば、それは素晴らしいことです。そのように頑張ってみるのは大切なことです。いつも助けをもらう立場ではなく、足りないことの多い小さい力でも人の助けになれば、最高の幸せではないでしょうか。そのような立場になれるように祈りながら、このミサを捧げましょう。

ありがとうございました。